

現実の現実性と時間の動性

入不二基義

本稿は、現代哲学ラボ第4回「〈私〉と〈今〉を哲学する——無内包の現実性とは？」⁽¹⁾において私が行った発表の草稿（永井均『存在と時間——哲学探究1』へのコメント）に基づいており、それに修正加筆を施したものである。

以下の本文は、大きく二つの部分から構成されている。前半（Ⅰ）が「現実の現実性」についてのコメントであり、後半（Ⅱ）が「時間の動性（時間の経過）」についてのコメントである。前半（Ⅰ）では、「現実の現実性」を永井的な〈私〉や〈今〉から切り離そうとする議論を展開して、現実の現実性が（無内包に加えて）無様相・無人称・無時制でもあり遍在的であることを強調する。後半（Ⅱ）では、「時間の動性（時間の経過）」を「現在（今）の移動」という考え方から切り離そうとする議論を展開して、時間の動性とは、今が動くことではなくて、更にその背後に退かざるを得ない潜在的な絶対変化であることを強調する。

I. 現実の現実性

まずは、『存在と時間——哲学探究1』（以下、「同書」と略す）からの引用で始めよう。

〈私〉とは何か、という問いはどうだろうか。これには二つの問い方がありうる。一つは、[...] じつはそのうち一つだけ現実外界が見えたり音が聞こえたり体が動かせたり [...] する（一つだけしか現実外界が見えたり音が聞こえたり体が動かせたり [...] しない）のだが、そいつはいったい何なのか、といった問い方である。[...] ここで問われているのは、あくまでも、可能性（どういうわけか現実にはそうでないもの）と対比された現実性（なぜか現実にはそうであるもの）なのである。／もう一つは、そもそもこれは何か、という問い方である。この場合には、現実性は特定の可能性と対比されてはいない。[...] これは何とも対比されておらず、それゆえ、何でないのでかわからず、それゆえ、何であるかわからない。これが在ることこそが空前絶後の事実だからである。この問いこそが最初の問い方の背後に存在する本当の驚きである。（同書、158–159 頁）

タウマゼイン

この引用で述べられている区別を、私は（永井が区別している以上に）より強く際立たせたい。その区別とは、「可能性との対比がある」現実と「可能性との対比がない」現実という区別である⁽²⁾。私は、前者のことを「様相内に埋め込まれた現実」と呼び、後者のことを「様相外の（無様相の）現実」と呼ぶ。この区別を強調することは、以下で見るように、現実の現実性を、無内包であるだけでなく無様相・無人称・無時制でもあり、遍在的であると捉えることに他ならない。

この区別を強調するためにも、引用後半部に出てくる「これ」について、注釈を加えておかなければならない。というのも、永井による「これ（この）」の使用と、私が意図する「これ（この）」の使用の間には、次のような違いがあるからである。

まず永井による「これ（この）」使用の「幅」を確認しておこう⁽³⁾。ヘーゲル『精神現象学』の「感覚的現実性」の議論を検討する場面（cf. 同書第10章）においては、「この痒み」「これは甘い」のように感覚表現を伴いつつ、「これ（この）」は、第0次内包（私秘性）を指示する使い方で（も）登場するが、もちろん永井自身の眼目は、「これ（この）」をそのような内包性（本質）から引き離して、無内包性を強調することのほうにある。その点を強調する場面では、「これが私だ」「これが今だ」「これとして在るにすぎない純粋な私」等のように、〈私〉〈今〉との結合において「これ」は出現する。この点、つまり「これ（この）」と〈私〉〈今〉あいだの互換性から分かるのは、引用前半の「可能性との対比がある」現実（〈私〉）と、引用後半の「可能性との対比がない」現実（これ）との区別は、あくまでも問い方の違いという区別なのであって、そこで問われている「現実」は同じ一つの現実だ、ということである。

実際、永井は〈私〉や〈今〉と「これ（この）」をほぼ互換的に使っていて、どれも「中心指向性（収斂性）」とでも呼ぶべき力の向きを共有している。また、第0次内包（私秘性）を指示する「これ（この）」もまた、同様の「中心指向性（収斂性）」という力の向きは共有している。「中心指向性（収斂性）」は、ウィトゲンシュタイン（『哲学探究』253）に倣って言えば、「これ（この）」を強調して言いつつ自分の胸の辺りを叩くジェスチャーによって象徴されるだろう。

しかし、私が考えるほうの「これ（この）」の用法は、そのような「中心指向性（収斂性）」をむしろ解除する働きを持つ。先ほどのジェスチャーの比喻で続けるならば、「これ（この）」と言いつつ、周囲（世界）を丸ごと両手で抱えるかのように円を描く仕草によって象徴される。「これ（この）」とは、「この世界」「この宇宙」「これ全部」なのであって、むしろ「全域指向性（発散性）」とでも呼ぶべき力の拡がり（あるいは「遠さと対比されない近接性」）

を特徴とする。こちらの「これ（この）」は、中心へと収斂するのではなく、中心を全体へと拡散させて無効にするような用法である。この用法の「この（これ）」は、外のない現実すべてを丸ごと内側から指し示そうとしている。ただし後述するように、「世界」「宇宙」等と共に使うことは、「これ＝現実」を表現するためにはミスリーディングなのであるが。

こうして、全域指向的（発散的）な「現実（これ）」は、中心指向的（収斂的）な「現実（私・今）」とは、単に（同じ一つの現実への）問い方が違うだけに留まらず、そもそも「現実」としての在り方（偏在か遍在か）が異なっている。そして、「可能性との対比がある」現実と「可能性との対比がない」現実との区別は、中心指向的（収斂的）な「現実（私・今）」と全域指向的（発散的）な「現実（これ）」の違いと重なる、と私は考えている。

同書においては、「人称・時制・様相」という枠組みを背景にして考察が進められるが、このセット（三疎み）の内部で論じられる限りは、その現実はいくまでも「対比あり」の現実であって、「対比なし」の現実にはならない。「人称・時制・様相」自体が、人称・時制・様相の区分における「対比」に依存するからである。逆に言えば、「対比なし」の現実に対応する「これ」には、人称も時制も様相もなく、もちろん「あれ」や「それ」との対比もないはずである（「これ」は、外のない現実を丸ごと内から指示する表現なので、その外からは指示ができない）。

また、「人称・時制・様相」というセットは、それぞれの内に「中心と周辺」の区別も持つ。すなわち「人称・時制・様相」は、私・現在（今）・現実世界を「中心」として、あなたや彼（彼女）・過去や未来・諸可能世界を「周辺」として配置するシステムである。それゆえ、現実の現実性が「人称・時制・様相」というシステムに巻き込まれる場合には、当然この「中心化」の効果を被ることになる。

「対比あり」という点は、引用文の前半の「そのうちの一つだけ」や「現実にはそうでないもの／現実にはそうであるもの」という表現において顕わになっているし、「中心化」という点は、〈 〉（山形括弧）内に置かれた表現が一人称であって二人称・三人称ではないことの内に読み取ることができる⁽⁴⁾。

他方、「対比なし」の現実のほうは、「対比なし」なのだから、「人称・時制・様相」という対比や中心化とは無関係の現実である。つまり、「対比なし」の現実には、人称・時制・様相の区分は何ら効力を発揮できないし、「対比なし」の現実には中心と周辺という区別もなく、そういう現実は「遍在的」と呼ぶのが相応しい。

引用の前半部において「対比」を創り出しているのは、一人称表現の「私」であり、「見える・聞こえる・・・（／見えない・聞こえない・・・）」や「そうである／そうでない」という肯定・否定表現である。その前半部においても、「現実には」が表す現実性自体は、むしろそ

のような「対比」を跨いで働いており、遍在的に出現していることが（私の観点からは）重要である。「現実にはそうであるもの」と「現実にはそうではないもの」という対比は、内容における肯定・否定の対比なのであって、「現実には」という現実性自体に対比相手があるわけではない。むしろ、肯定と否定の違いを跨いで、同じ一つの「現実」が働いている。「対比あり」の現実について述べる引用前半部においてさえも、現実性自体は実は「対比なく」働いているのであって、「対比」はあくまで人称や肯定・否定に由来するというべきである。

ちなみに、そのような「対比」や「中心化」をできるだけ回避して、「対比なし」の現実を表現するためには、「現実世界」という言い方は避けたほうがよいだろう。「現実世界」という言い方は、様相論の文脈での「可能世界」との対比を呼び込むし、「世界」の状態（内包）を呼び込むからである。「現実」は、「（現実世界）のような」実体的な名詞としてではなく、「現に」という副詞的な働き（現実性）として考えた方が適切である。

さて、「対比あり」の現実と「対比なし」の現実の区別を上述のように、より強く取るならば、現実の「無内包性」についてもまた、次のような注釈を加えることができる。それは、「有内包（第〇次内包・第一次内包・第二次内包）」と「無内包」という二区分ではなくて、「有内包と脱内包と無内包」という三区分の導入についてである⁽⁵⁾。呼び方は、「脱内包」のかわりに「反内包」でも「半内包」でも何でも構わないだろう。「人称・時制・様相」との関連で表現するならば、次のように分けておくことができる。

- | | |
|------------------------|-----|
| (1)「私の現実・現在の現実・世界の現実」： | 有内包 |
| (2)「現実の私・現実の現在・現実の世界」： | 脱内包 |
| (3)「現実の現実性」それ自体： | 無内包 |

(1) では、「現実」が、「私・現在・世界」の作用域内におかれているために、その三者による限定を受け取る仕方で、現実の中身が読み込まれる（内包を持つ）ことになる。それに対して(2)では、「現実」が三者の作用域内から外に出る（順位が入れ替わる）ことで、(1)のような仕方で内包を持つことから解放される。しかしなお、(2)では、私・現在・世界による「中心化」は行われるし、最小限の人称的・時制的・様相的な内包性は残存する。しかし、(2)における「現実の」は、ほんとうは「私・現在・世界」という三領域を貫通して一様に働く遍在的なものであるから、そこには中心化は生じない。その点を明示的に取り出すと、(3)になる。(3)は、人称・時制・様相の表現を消し去ることで、遍在一様な現実を表現しようとしている。結局、(3)によって表現される「現実

性それ自体」「無内包の現実」は、無人称・無時制・無様相でもあるということである。「無内包の現実」は、どんな領域への囲い込みや中心化もすべて無効にしてしまう「遍在的な現実」なのである。

にもかかわらず、囲い込みや中心化が生じて、現実の「私」化や「現在」化や「世界」化が進行するとすれば、つまり「遍在的な現実」(3)が「偏在的な現実」(2)へと変質するとすれば、それは(現実性自体とは)別の要因に由来するだろう。

その「別の要因」とは(少なくともその一つは)、「現実」が「現前」「顕在」と取り違えられやすいという点にあるだろう。「現に」という現実性は、ありありと現前しているかどうか、顕在的であるか潜在的であるかは別のことである。現実とはたえありありと現前していなくとも現実であるし、たとえ潜在的であるとしても、「現に」潜在しているのだから現実には他ならない。現実とは、現前と同一ではないし、潜在とも対立しない。むしろ「現実」とは、顕在的なものであれ潜在的なものであれ、またありありと現れていようがいまいが、まったく無差別にそのすべてなのである。にもかかわらず、現実を現前や顕在と同一視してしまうと、現実とは「ありありと現れている何か」へと不当に狭められることになり、偏在化してしまう。

その点を時制の場面で言うならば、次のようになる。「現実」であることと「現在」であることとは別のことである。にもかかわらず、(過去や未来ではなく)現在を「ありありと現れている何か」として、特権的な現実であるかのようにみなしてしまうと、現実とは現在へと不当に狭まり、現実性は現前性・顕在性に変質してしまう。現在は過去や未来とは違って、「ありありと現れている時」ではあるかもしれないが、そのこと(現在の現前性)は、過去が「現実の過去」であり、未来が「現実の未来」であることにいっさい影響しない。現在の現前性は、現実の現実性とは異なるからである。現実の現実性は、時制の区別(過去・現在・未来)とは無関係であり、その意味において、現実の現実性は「無時制(汎時制)」なのである。

この点を、累進構造の図(同書, 50 頁)と関連させるならば、その構造の内に潜在している(と私には思われる)ダイナミズム(以下で「蛇腹的な開閉」と呼ぶことになる)を取り出すことができる。「蛇腹的な開閉」は、「累進」とはまた別の運動をその図に上書きすることになる。以下では、まず永井による累進構造の図を提示したうえで、順次それに対して上書きを加えていくことにする。

図1

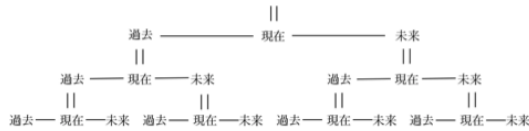
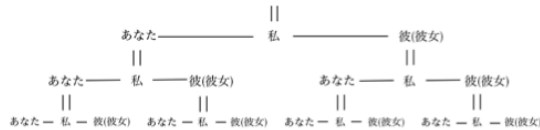


図2



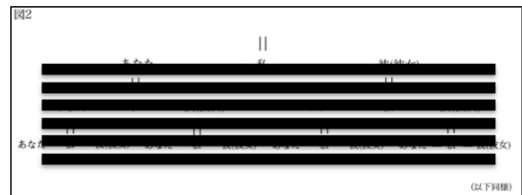
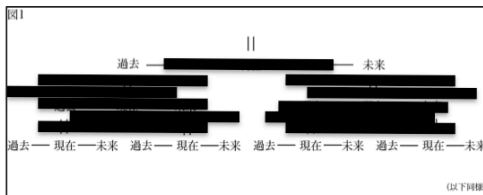
(以下同様)

まず、「図1において、最上段が現実の現在・過去・未来を表している」と言われている点に注目し、次のように敷衍しておこう。「最上段であること」自体、すなわち「横の線」全体が現実性を表現しているのであって、その線上に「現在・過去・未来」や「私・あなた・彼(彼女)」(図2)という三区分が書き込まれていることは、その最上段性(現実性)にとっては無関係である。そして、図1や図2は現在や私へと「中心化」された図になっているけれども、そのこと(中心化)も、その最上段性(現実性)にとっては無関係である。現在や私を中心を占めることは、別の要因(対比や現前性など)に由来するのであって、無内包の現実性自体からは出てこない。こうして、「現実の現在・過去・未来」という表現における「現実の」は、完璧に無差別に汎通的に三区分を射通している。つまり「横の線」は、その一線全体が丸ごと現実性に満たされているのである。このように「横線の無差別の全体性」を強調したうえで累進構造の図を眺めるならば、「縦の関係(段差)」のほうにも違った見方を加えることができる。

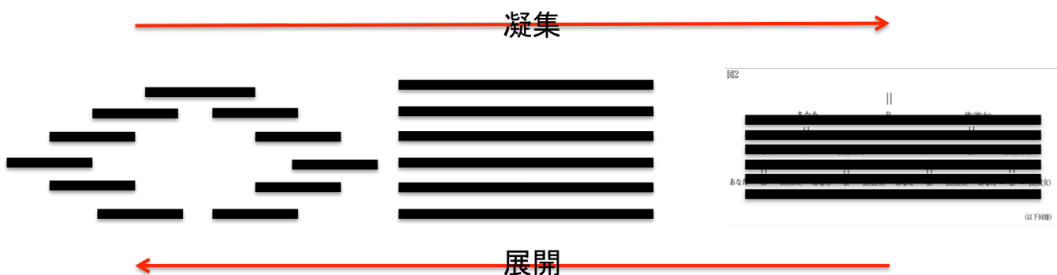
図の「縦の関係(段差)」を成立させているものは、現実と可能の対比であり、それに基づく中心(現在や私)の位置の移動である。遍在的で一様であるはずの現実の内に、「現実と可能」「中心と周辺」という対比とそれに基づく移動が持ち込まれることが、「縦の関係(段差)」である。しかしながら、その「縦の関係(段差)」の進行において、そもそもの現実の「無差別性」「遍在性」、すなわち「横線全体の丸ごと性」が消え去ってしまうわけではない。いやむしろ、それは伝播する(せざるを得ない)からこそ、「横一線」が「横一線」のままに、「縦の関係(段差)」の中でもどこまでも繰り返されるし、そうである他はない。

その遍在性の「伝播」のほうに注目するために、累進構造の図からあえて「時制の三区分」と「現在による中心化」という偏在的な要因を後景に退かせて、「横線の遍在性・一様性」「横一線の丸ごと全体性」のほうだけを前景化してみよう。そうすると、どう見えるだ

ろうか。まずは、（特に現在は特権化されることなく）無数の直線が僅かに位置をずらしつつ、縦に（ピラミッド状に）重なっている姿が現れてくるだろう。それは、元の図のような隙間があって中心を持つツリー構造ではなくて、びっしりと重なり合った直線が無数に積み重なっているような図に見えるだろう。さらに言えば、偏在の後景化と遍在の前景化によって、縦関係における僅かな位置のズレ（累進）からも、もうほんとうは意味が失われている。そこで、「無数の横線が縦に積み重なった姿」は、もうピラミッド状（台形状）であるというよりも、横一線の丸ごと全体が無数に重なっているだけで、結局は極太の一本の直線（あるいは長方形）が描かれているかのように表象されるだろう。こうして、「縦」の関係（累進）はすべて「横」線（すなわち遍在的な現実）の内へと埋没する。つまり、現実一色で塗りつぶされる。次の図は、その点を表象するものである。



これは、「多重の縦関係」が「横線の無差別な遍在性」の内へと畳み込まれて潰れてしまうことに相当する。累進構造の図には、上下に「展開」する方向性だけでなく、上下が「収縮（凝集）」する方向性も含まれているということである。累進構造は、無限後退や循環などの「終わらない展開」を表現すると共に、その構造自体が収束（終息）する方向性（収縮・凝集）もまた、同時に表現していることになる。累進構造にこの両方向性が含まれていることを表すために、アコーディオンの蛇腹が閉じたり開いたりするイメージで考えることにすると、累進構造には「蛇腹的な開閉」が含まれていると言っておくことができる。現実一色へと塗りつぶされる「閉」と、隙間ができて構造が顕わになる「開」とが、繰り返される運動を、累進の図に上書きしたことになる。



ちなみに、「横一線への収縮・凝集」という「閉」方向性を強調することは、多段の存在を認めたうえで、その一つを「絶対的な最上段」として確保することとは違うということに注目してもらいたい。むしろ、「最上段」性は棄却（キャンセル）されることでこそ、その「絶対性」が完成する。というのも、横一線の無差別性・遍在性がすべての段に浸透してしまうことによって、多段性（累進性）自体が棄却（キャンセル）され、「上段／下段」という相対性自体が無くなることで、逆に、最上段しかないことと変わらない絶対性が実現されるからである。この区別（「最上段を認める・認めない」と「上段・下段がそもそもない」との区別）は、再び「対比あり」と「対比なし」との違いに相当する。

また、「閉」方向と「開」方向との対立は、現実主義と可能主義（同書、276 頁）の対立とも異なる。現実主義と可能主義の対立は、累進図における最上段のあるなしに関する対立であるが、「閉」方向と「開」方向との対立は、累進図そのものの構造消失と構造展開という対立だからである。累進図における現実主義は「最上段が無限累進をストップさせる」と考えることに相当し、累進図における可能主義は「無限累進をストップさせる最上段はない」と考えることに相当する。しかし、「閉」方向と「開」方向が対立するということは、「無限累進の始まらなさ」と「無限累進の始まり」との間で起こる対立であって、これら（最上段のあるなしの対立と開閉の対立）の水準は異なっている。近似的に図式化しておくために累進図に上書きするならば、上で示したような図になる。便宜上（見やすいように）「隙間」を僅かに残した図になっているが、実際にはそれさえも消失するので、極太の横線（現実一色）になる。

II. 時間の動性

永井は、「時間の経過」を「現在の移動」と言い換えている（同書、246 頁）。単に言い換えているだけではなく、時間の動性についての考察全体が、「時間が経過するとは、現実に関が動くことである」という考え方によって主導されている。時間の動性については多角的な考察がなされているが、その一局面において永井は以下のように述べる。

もし現在（今）がそういう不思議な性質〔引用者註：極限的に豊かであると同時に極限的に貧しい存在でもあること。要するに、端的な現実性〕を持っていなければ、動く現在は本当にたんなる針のようなもの（それがその上を動く、それとは独立の空間のごときものを背後にもつ、外部からその動きを見ることができると一つの動く物体）になってしまい、その動きはふつうの動きに、したがって時間の経過という特殊な変化はふつうの変化に、なってしまうからである。（同書、281 頁）

たしかに、「現在の移動」は、その現在が「端的な現実性」を持たないならば、ものが空間的に移動することと変わらなくなってしまう。そのような移動は、「時間の経過」ではなくて、(むしろ時間の経過を前提にして初めて意味を持つような) 位置の移動にしかならない。何かが空間的に移動すること自体は、「時間の経過」ではなくて、時間の経過において起こる出来事である。一方、「時間の経過」自体は出来事ではない。

では逆に、現在(今)が「端的な現実性」を持つならば、現在は移動して時間は経過するだろうか。いや、それ(端的さ)を「持つ」だけでは、まだ時間の経過にはならない。というのも、現在(今)が「端的な現実性」をただ持つだけならば、すなわち持つだけで失わないならば、現在(今)は端的に現実のままだからである。それではむしろ、現実の現在は、動きとは無関係になってしまう。「端的な現実性」を持つだけでは、現在は動かず時間は経過しない。

結局、現在(今)が「端的な現実性」を持つだけでも持たないだけでも、どちらにしても、それだけでは「現在の移動＝時間の経過」は導き出せない。そこで、現在(今)は、「端的な現実性」を持つだけでも持たないだけでもなくて、持たなくなる(一度だけ失う)あるいは持つようになる(一度だけ獲得する)、と考えざるを得ない。基本的には同書も、この方向で「現在の移動＝時間の経過」を考えていると言っていいだろう⁽⁶⁾。

ところで、端的な現実性の「出現／消失」「獲得／喪失」というこの考え方に対しては、次のような疑問を向けることができる。それは、端的な現実性の「出現／消失」「獲得／喪失」を加味した「現在の移動」でも、まだ「時間の経過」になるためには不十分ではないかという疑問である。

もう一度確認しよう。たしかに、現在が「端的な現実性」を持たなければ、その移動は空間的な移動に等しいものになるだけで、時間の経過にはならない。また、現在が「端的な現実性」を持つだけならば、「動き」とは無関係であり、現在は端的に現実であるだけである。そこで、現在が移動する(今が動く)ためには、「端的な現実性」を持つようになり、また持たなくなる(一度だけ獲得しそして失う)のでなければならない。ここまでは、とりあえず「よい」としよう(ここでは、「端的な現実性」はそもそも出現(獲得)したり消失(喪失)したりできるものなのかという疑問は、問わないでおこう⁽⁷⁾)。しかし、その「端的な現実性の出現／消失(獲得／喪失)」だけで、もう十分なのだろうか。それだけではまだ、「時間が経過する」ためには何かが足りないのではないか。

端的な現実性の出現／消失(獲得／喪失)とは、各時点(現在)において、端的な現実性が点滅(出現と消失、獲得と喪失)を不連続的に反復するだけのことかもしれないでは

ないか。その場合には、「現在の移動」とは、「時間の経過」ではなくて「不連続的なジャンプ」ということになる。実際には非連続的なジャンプの反復にすぎないものが、見かけ上の連続的な移動（時間の経過）として捉えられている可能性が残るのではないか。それが、端的な現実性の「出現／消失」「獲得／喪失」では、まだ「時間の経過」になるためには不十分ではないかという疑問である。比喩的に言えば、「現在の移動（ジャンプ）」を「時間の経過」のように思ってしまうのは、電光掲示板における独立の各電灯による不連続の点滅が、連続的な文字移動のように見えてしまうことと同じなのでないか⁽⁸⁾。

この疑問は、次のことを示唆している。もし「端的な現実性の出現／消失、獲得／喪失」がデジタルな電灯点滅のようなものだとすると、「現在の移動」は実は「瞬間的な跳躍」のようなものであって、そこからは「時間の経過」は（まだ）導き出されてはいない。つまり、「現在の移動」と「時間の経過」のあいだには、まだ楔を打ち込む余地が残っていることになって、「時間が経過しない現在の移動」「時間が経過するのとは別の仕方での現在の移動」という考え方があり得ることになる。

もちろん、この現実性のデジタルな点滅反復の「間」に、「時間の経過」を挿入して補填するならば、連続的な時間の流れを回復することはできる。しかしそれでは、「時間の経過」を背景にしたうえで「(ジャンプとしての)現在の移動」が生じていることにしかならない。つまり、「現在の移動」がそのまま「時間の経過」であると考えすることはできなくなる。「時間の経過」は、さらにそのジャンプの背後で作動するものとなる。

さてここで、「デジタルな点滅（現実性の出現／消失、獲得／喪失）」から「連続的な時間の経過」へと至るために、別の何かをさらに付け加える方向へ進むべきだろうか。いや、たとえ何を付け加えて考えても、「点滅」から「経過」には至ることはできないように思われる。むしろ、そのように「何を付け加えても至れない」こと自体の内に、「時間の経過」がきわめて特殊な変化であることが表現されていると、(逆転させて)考えるべきであろう。「何を付け加えても至れない」のは、そうであることが、「時間の経過」にとってそもそも構成的で本質的な条件だからである。そのような方向で考えてみよう。

「時間の経過」は、他の変化（状態変化や位置移動など）の背景として潜在するのみであって、けっして前景化することはない。そこで時間変化は、他の変化（時間変化ではないふつうの変化）に寄生することによってしか、表象することができない。その点では、時間変化は他の変化に依存する。時間の経過が、川の流れや時計の針の移動などの変化、あるいはものの状態変化などに重ねられて表象されるのは、このためであり、その表象的な依存関係は必然でもある。

にもかかわらず、それ自体は表象され得ない時間変化が背後で潜在進行していてこそ、

その他の変化が前景で進行できる（とみなされねばならない）。また、たとえその他の変化が起こらなかつたとしても、時間変化のほうは表象されないだけで潜在進行している（とみなされねばならない）。その点では、時間変化は、他の変化に依存しない絶対的な変化なのである。

つまり、時間変化は、表象的には他の変化に寄生しつつも、寄生先の背後で潜在的に独立進行する絶対的な変化である（とみなされねばならない）。「時間の経過」という絶対的な背景は、通常の相対的な背景とは違って、前景化することがあり得ず、後景に留まり続けて潜在状態のまま作動することをその本質とする。

ゆえに、時間変化は、どんな顕在的な要因を追加して考えたところで、その加えた要因に対して、さらに潜在的な背景であり続ける（背景に退き続ける）。そのように働いてこそ、その変化は「特殊な変化としての時間の経過」だとみなし得る。それが「何を付け加えても至れない」ということの実態であり、時間変化が特殊だということである。

「時間の経過」をこのような「潜在的な絶対変化」と考えるならば、「時間の経過」は「現実の現在の移動」とイコールでは結べないことになる。むしろ「時間の経過」は、「動く今」よりもさらに「極限的に豊かであると同時に極限的に貧しい」存在であり、それ自体はいっさい表象されずに（＝極限的に貧しく）、全てをその変化に巻き込んで働くことを止めない（＝極限的に豊か）。このように、時間の動性もまた、現実の現実性と同様に「無内包」で「遍在的」な在り方をしている⁽⁹⁾。

Iの現実論とIIの時間論は、平行関係にある。したがって、現実論で（1）有内包（2）脱内包（3）無内包という三つの水準を区別したのと同様のことが、時間論に関しても言える。

- | | |
|------------------------------|--------|
| （1）（ものの移動のように）今が動く： | 有内包の水準 |
| （2）（現実性の獲得／喪失により）この今が現実にく動く： | 脱内包の水準 |
| （3）（潜在的な絶対変化として）時間が推移（経過）する： | 無内包の水準 |

（1）は「ふつうの変化」へと変質した時間表象であり、I（1）での「現実」に対して内包を与えてしまうことに対応する。つまり、前景化した（別の）変化を時間変化であるかのようにみなしてしまうことは、現実の現実性が特定の内容を持つかのようにみなしてしまうことに対応している。

（2）は、その「ふつうの変化」への変質を拒んで、「端的な現実性の獲得／喪失」として時間の動性を捉えようとする。しかしそれは、（時間の経過には届かず）「現実の瞬間的

な跳躍」に留まってしまい、「時間の経過」をさらに背後に退かせる。Ⅰ（２）には「中心化」が含まれていたことに対応して、Ⅱ（２）には「中心の生滅（の反復）」が含まれている。

それに対して、（３）の「時間の経過」は、（１）のように表象されることはなく、また（２）のように如何なる「中心（の反復）」も含まず、ただただ潜在的にそして遍在的に働くのみである。「時間はただ経つのみ」としか言いようがなく、そこにはどんな内容規定も量的な規定も、また区分や方向性もいっさい入り込めないのが、（３）の時間推移（経過）である。

また、（１）～（３）のあいだの関係を、次のように捉えることもできる。（１）（２）（３）は互いに独立に存在する三極なのではない。むしろ、（１）と（３）という正反対の両極があつて、その両極どうしが互いに終わることのない転換（反転）を繰り返すことの結果として、いわば残像のようなものとして、（２）が現れてくる。比喩的に言えば、黒白二色のオセロの駒が、表裏の反転（回転）を高速で繰り返すことによって、第三色の灰色が見えてくることに似ている⁽¹⁰⁾。そのような意味において、〈私〉や〈今〉という現実性、そして今が現実動くという動性は、一方の有内包の現実や時間表象と、他方の無内包の現実や時間経過という両極端のあいだで、両極振幅の効果として生じる「影」のようなものであるとすることができる。

同書の中では、文字盤と針（の移動や位置）と「今見る」の三者によって時間の動性が考察される場面があるが⁽¹¹⁾、上記の（１）～（３）をその場面と関連させるならば、次のように言うこともできる。こんどは、（１）と（２）をペアとして捉える。そのペアの背景において、そのペアの作動からは退きつつ、（３）が働く。そのように、三者関係を見ることもできる。

文字盤と針の関係は（１）の水準に対応し、「今見る」が加味されることは（２）の水準が加わることに対応する。もちろん、「今見る」自体が「針」化されて表象されると、（２）は（１）へと転落することになる。また、転落せずに残り続ける（２）の水準こそが、「今見る」が持ち込もうとしている端的な現実性である。（１）と（２）は、反発しつつ連動して働いている。

では、（３）の水準はどのように働くのか。（３）は、（１）（２）の反発連動からも退きつつ、（１）に対しても（２）に対しても無差別に「特殊な背景」を提供するように働く。「特殊な背景」であるのは、文字盤のようににはけっして「見えることがない（今見ることもない）」背景だからであり、しかも文字盤のようにには固定されることなく、むしろ（針の移動の裏面に寄生して）潜在進行し続ける「動く」背景だからである。その「見えない動

く背景」は、(1)だけでなく、(2)の背後でも働いている。すなわち、「今見る（端的に見える）」ことにも、「それ以外は端的に見えない」ことにも、さらに「たとえ今見ていなくても」まで全部含めて、そのすべてを無差別に貫いて、ただ一つの時間が推移（経過）していることになる。それが(3)の水準である。

「現在が動く」のさらに背後において潜在進行するのが「時間の経過」であり、「現実の現実性」と同様に「時間の動性」もまた、中心化されることなく遍在的に働いている。Ⅰでは、「現実」の無差別な遍在性を表象するのが、「(無数の線が凝集してできた)ものすごく太い一本の横線（むしろ平面）」であった。それに準じて言うならば、「時間の経過」の表象は、その太い横線（むしろ平面）を満たしている黒インクが、いっさいの偏りなく（もちろん特異点もなく）流れ去っていて、線（面）の形も危うくする（不定形のインクの流動のほう全面的で、局所で線や面という図形らしきものが一時的に出現している）というイメージに相当するだろう。もちろん、これは表象不可能なものの表象にすぎないけれども。

Ⅰで扱った「現実の現実性」とⅡで扱った「時間の動性」は、共に無内包の遍在態として一体で働いている。「現に」という現実性は、もちろん時間の経過全体に及んでいる（現に時間は経っている）。しかし、一体であるにもかかわらず、現実の現実性は、そもそも動きとは無関係という意味で「静態」であるのに対して、時間の動性は、そもそも静止・停止とは無関係という意味で「動態」である。つまり、両者は静態と動態としては相互に矛盾的でもある。一体であり矛盾的でもあるという仕方で、現実の現実性と時間の動性は反発協働しているのである。これは、同書が詳細に分析してみせてくれた「マクタガートの矛盾」とは別物であろうが、しかしこれもまた、一種のパルメニデス的世界像とヘラクレイトス的世界像との対立ではあるだろう⁽¹²⁾。

註

(1) 2016年9月23日に行われた「現代哲学ラボ」(<http://www.philosophyoflife.org/jp/lab/>)主催のトークイベント（於：早稲田大学・戸山キャンパス）。ゲスト：永井均、コメンテーター：入不二基義・森岡正博・司会・田中さをり。なお、当日の記録は、『現代哲学ラボ 第4号：永井均の無内包の現実性とは？』[Kindle版, <https://www.amazon.co.jp/dp/B01N36YI2O/>]（哲楽編集部・編）として、電子書籍化されている。なお、「現実の無内包性」「無内包の現実」についての議論は、永井均・入不二基義・上野修・青山拓央『〈私〉の哲学を哲学する』（講談社）所収の拙論を出発点としていて、その後も続いている。

(2) この引用から分かるように、永井自身は「可能性と対比された」現実と「特定の可能性と対比されていない」現実とのあいだで区別をつけている。一方、私のほうは、「可能性と対比された」現実と「そもそも可能性と対比されていない」現実との区別を考えようとしている。

あるいは、「より強く」という差は、「これ」についての捉え方の違いでもある。以下の本文でふれるように、「中心指向性（収斂性）」の「これ（この）」と「全域指向性（発散性）」の「これ」の違いであり、中心指向性（収斂性）によって生じる「偏在」が消えて、全域指向性（発散性）によって生じる「遍在」

が強調されたほうが、「無内包」性が完璧になると私は考えていることになる。

また、永井自身は、「[…] これとして在るにすぎない純粋な私とは、まだ他者（タウマゼイン語法でいうところの「可能な私」）と対比されていない単なる現実性そのものとしての私、ということである。それは、当然のことながら、第一人称に与えられる公的特権はまだ持っていない。」（同書、167 頁）と述べている。一方、私のほうは、「対比されていない単なる現実性そのもの」は、「第一人称に与えられる公的特権」を持たないのはもちろんだが、そもそも「第一人称（私）」に結びつけることもできない、と考えていることになる。言い換えれば、「これとして在るにすぎない純粋な私」「単なる現実性そのものとしての私」という表現において、「純粋な私」「としての私」の部分が余計であると考えていることになる。

次の点にも注目すべきであろう。永井自身も、「とはいえしかし、ほんとうに物自体だとすれば、〈私〉だとか〈今〉だとか、何らかの内容の規定を示唆する呼び名で呼べるはずがない。だからたぶんそれらは、このような超越論的（＝実在を構成する）形式が適用された後に、そのような形式をすり抜けて生き残った（そのような形式によって変形させられながらも現象界の中に生き残った）、物自体のお零れのようなものだろう」（同書、77 頁）と述べている。まさにその通りだと思う。ということは、その言葉遣いを引き継いで言うならば、物自体の「お零れ」ではなく「物自体」本体に相当するのが、「現実の現実性」それ自体であって、「お零れ」には内包が僅かに残されるが、「本体（物自体）」は完全に無内包である、と私自身は考えていることになる。

(3) 同書の（第 10 章に加えて）第 11 章の冒頭においても、「感覚の貧しさは、どんなに貧しくとも、たとえ言葉で言い表すことができないとしても、いわく言い難い「これ」という特定の内容があった。[…] 対して、「今」の貧しさは、「これ」と指せるような特定の内容がない貧しさである」と言われているように、「これ（この）」には、有内包（私私性）と無内包（独在性）の両方に跨がって使われている。これが「幅」である。

(4) 永井は、「〈私〉とは、世界が現実 そこから開けている唯一の原点のことである」という言い方をするが、その「そこから開けている」や「原点」が、まさに「中心化」を表している。その起点性・原点性・中心性は、遍在的な現実の現実性にとっては外的なものであることを、私は強調していることになる。そして、その起点性・原点性・中心性は、すぐに「対比あり」の場面へと接続することは必定であり、「対比なし」の現実とは鋭く対立することになる。たとえば、「世界には、〈私〉である人とそうでない人が存在している、これが現実である」（同書、239 頁）という表現には、「対比あり」の現実がよく表れている。

(5) 「今」や「私」から感覚的現実性（第 0 次内包）を取り除いて、それら特有の現実性（無内包）が浮かび上がるのと同様に、さらに無内包の「今」や「私」から、その「今」という時間要因や「私」という人称要因まで取り除いてこそ、「現に」という現実性の無内包がいつそう明らかになると考えている。この中間段階をここでは「脱内包」と呼んでいることになる。なお、第 0 次内包（私私性）・第一次内包・第二次内包については、永井均『改訂版 なぜ意識は実在しないのか』（岩波書店）を参照。

(6) たとえば、「そうだとすると時間は、ただこれしかない（自余のすべてはその内部にある）はずのものが、次々と連接して—という意味で「これしかなさ」が次々と消されて—存在する、というきわめて特殊な、動的な矛盾を孕んだあり方で存在していることになるだろう。どうしてそんなあり方が可能なのであろうか。」（同書、262–263 頁、下線は引用者）と述べられている。また、「（一回のみの）実現」という考え方にも、同様の考え方を読み取ることができる。次を参照。「つまり、それはある特定の時点でしか（その一回しか）実現されず、しかもそのときには必ず実現されねばならない、という限定がなされているわけである」（同書、293 頁、下線は引用者）。「一回だけ通るとは、B 関係（より前・同時・より後）と等置されうる可能な A 変化（未来⇒現在⇒過去）を、現実の現在が一回だけ実現する、ということである」（同書、294 頁、下線は引用者）。さらに、「現実は今でなくなる（ように必ず見える）」（同書、321 頁、下線は引用者）ことを、「絶えざる離脱」（同書、321 頁）と述べている点にも、「この方向」（現実性の獲得／消失によって現在の移動を考える方向）が読み取れる。

(7) 「現実（性）」についての私の捉え方においては、「現実化」「実現」「（現実性の）出現」といったことは、そもそも生じない。「現実化」「実現」というのは、「現実でないものが現実になる」ことではなくて（それはそもそも不可能）、あくまで「現前化」「顕在化」にすぎないと考える。つまり、「可能性が現実になる」という考え方を私は認めず、それは実は「現実において、潜在的なものが顕在的になる」ことなのだと考える。潜在的なものも顕在的なものも「現実」であることに変わりはなく、「現実でないものが現実になる」ということは、「無から有が誕生する」ことに等しい。「無から有の創造（あるいはその逆）」を認める限り

において、「現実でないものが現実になる」ことを認めることはできるが、それは「可能性」が「現実性」に変わることはない。

(8) ここで比喩として使っている電光掲示板のイメージについては、[\[http://philosophy-zoo.com/Movie-Irifuji-480.mov\]](http://philosophy-zoo.com/Movie-Irifuji-480.mov)を参照。

(9) よくあるマクタガート解釈のように「A 系列は時間の動性を含むが、B 系列は静的である」とは考えずに、時間の動性は（概念的に抽象的にではあるが）むしろ B 系列に保存されていると永井は考える。これはとても重要な指摘である。たとえば、同書第 11 章 p. 203 では「時間的動性は概念的にはむしろ B 系列に保存されており、A 系列が保存しているのはむしろ現在の端的性（なぜか現に与えられているこういう性質）のほうである、ともいえる」と述べているし、同書第 14 章の p. 267 では「A 系列の本質であると考えられている「現在（今）が動く」（出来事が未来・現在・過去と A 変化する）という考えは、むしろ（通常はまさに動性の否定こそを本質とする）とみなされている B 系列の本質なのではないか」と述べている。また、同書第 15 章のタイトルは、まさに「B 系列こそが時間の動性の表現である」となっている。

それに倣って（その延長線上で）述べるならば、私が考える「時間の動性」は、B 系列的な動性よりもさらに抽象度の高いものとなっている。それは、「二つの物差しの中のずれの運動」（相対運動）ではないことはもちろんのこと、B 系列的な「方向性」さえ持つことができない。方向性を持っていないのは、潜在的な絶対変化は「表象されえない」からであり、また（それでもなお寄生的に）表象される場合には、どちらの方向性（過去→未来、過去←未来）でも表象できなければならない背景変化だからである。両方向の表象が可能で、しかも相対運動でないならば、（われわれが考えるような）一定の方向性は持つことができない。

(10) 青山拓央の教示による比喩。また青山の時間論と自由論については、青山拓央 (2016) を参照。

(11) 同書 198–199 頁, 263–266 頁, 273 頁, 289–290 頁, 301 頁 など。

(12) 258 頁では「つまり、時間の場合には二種類の端的な現実性があるのだ。端的なこの現在と端的なこの動く現在の二種である。それぞれを、パルメニデスの世界像とヘラクレイトスの世界像と呼ぶこともできる」と述べられている。一方、本文で私が述べたほうの両世界像とは、「現実の現実性」自体と時間の動性（時間の経過）とのあいだの一体性と矛盾のことである。

文献

青山拓央 (2016). 『時間と自由意志——自由は存在するか』, 筑摩書房.

Hegel, G. W. F. (1807). *Phänomenologie des Geistes*, Suhrkamp. G. W. F. ヘーゲル『精神現象学』（金子武蔵訳, 岩波書店, 2002/長谷川宏訳, 作品社, 2008）.

入不二基義 (2015). 『あるようにあり、なるようになる——運命論の運命』, 講談社.

入不二基義・森岡正博 (2016). 『現代哲学ラボ 第 1 号: 入不二基義のあるようにありなるようになるとは?』 (Kindle 版), MID アカデミックプロモーションズ.

McTaggart, J. E. (1908). “The Unreality of Time”, *Mind* vol.17, 456–474.

永井均 (2016). 『存在と時間——哲学探究 1』, 文藝春秋.

永井均 (2016). 『改訂版 なぜ意識は実在しないのか』, 岩波書店.

永井均・入不二基義・上野修・青山拓央 (2010). 『〈私〉の哲学——を哲学する』, 講談社.

永井均・森岡正博・入不二基義 (2017). 『現代哲学ラボ 第 4 号: 永井均の無内包の現実性とは?』 (Kindle 版), MID アカデミックプロモーションズ.

Wittgenstein, L. (1953). *Philosophische Untersuchungen*, Suhrkamp. 『ウィットゲンシュタイン全集 第 8 巻 哲学探究』（藤本隆志訳, 大修館書店, 1976）.

〔青山学院大学教育人間科学部・教授〕